

会員制ジムの深夜、絞ったEDMが流れる館内はひっそりと静まり返っていた。いや、耳をそばだてれば、漏れるような吐息と押し殺した嬌声が聞こえてくる。だがそこに疑問はない。猛漢町とはそういった所だからだ。照明を落とし、奥まったフリーウェイトエリアは、監視カメラの死角。そこには、ライトを白く反射させる角をもつ雄牛、ダラワンだけがいる。

しかし、響く声は2人分のものだ。

「重くないのか？ 無理すんなよ」

俺が下から声をかけると、ダラワンは低い声で笑った。

「これくらい、軽いもんだ。……お前が見てるだけで、力が出る」

分かるのかと言いかけて、止めた。言葉通りに俺は頭上に跨るダラワンから視線を外すことができず、すでに勃起した俺の透明チンポからは、トロトロと降参の汁を垂れ流している。

巨大な牛獣人の体は、全身を汗みずくに光らせていた。茶色の短毛に覆われた筋肉が、300kgのバーベルを担いで隆々と波打つ。彼は下半身を露わにしたまま、ゆっくりと脚を開き、深く腰を落としていった。

「くっ……っ」

低く唸るようなダラワンの息が漏れる。太ももの筋肉が岩のように隆起し、血管が浮き上がって激しく脈打つ。

ハムストリングスが鋼のワイヤーのように張りつめ、臀部の巨大な筋肉が収縮と伸張を繰り返すたび、力強い波紋が全身に広がる。

背中 of 広背筋は翼のように広がり、肩から腕にかけての三角筋と上腕二頭筋が、鋼鉄の塊のように硬く盛り上がっていた。

牛獣人の圧倒的な力強さが、汗とともに透明人間の顔面へ滴り落ちる。

スクワット of 下降とともに、雄牛 of 巨大な睪丸が重たげに垂れ下がる。汗で湿った熱い表面が、床に寝転がった俺の顔面に、ぴたりと乗せられた。細かな毛皮が柔らかく吸い付き、中の重みはずしりと顔全体を圧迫した。

「……っ」

熱かった。少し冷たい汗の膜の下で、柔らかい袋が俺の頬にへばり付くように形を変える。パンパンに詰まった重みと脈動が、顔の上ですりりと滑る。圧倒的な雄の匂いが、視界を奪われた俺の鼻腔を満たした。汗の塩気と、獣特有 of 濃厚な香り。

「は……っ、熱い……ダラワン」

思わず口を小さく開けてしまう。舌が自然に伸びそうになるのを、必死に堪えた。

ダラワンが低く笑う。

「我慢できなくなってきたか？ 可愛い顔してるぞ」

俺の表情が見えるわけがない。あの事故以来、誰にも。だけれど、ダラワンには見えているのだろう、欲情した犬のように舌をはみ出させ、眼尻を下げて媚びるメスの姿が。

再びバーベルを担いだ彼は、動きをよりゆっくりと、焦らすように腰を落としていく。太ももの四頭筋が最大限に伸び、血管がびっしりと浮き上がった表面が、淫靡な照明の下で艶やかに光る。

筋繊維の一本一本がはっきりと浮かび上がり、力の限界まで耐え抜く雄々しさが、視覚と嗅覚を覆い尽くしていく。

ダラワンの睾丸が俺の顔に再び乗せられ、ゆっくりと腰を振られた。細かな毛皮の舌触りが、唇と舌先に絡みつく。汗のしょっぱさに、わずかな粘液の生々しさが混じった。

「ん……っ、くちゅ……」

俺はたまらず舌を這わせた。熱く脈打つ感触に、頭がぼうっとする。

「ふっ……いい子だ」

そして、ゆっくりと腰を浮かせる動作の中で、彼の男性器が悠然と顔の前に晒された。

それはまさに雄牛の象徴だった。長大で太く、血管がうねるように浮き上がった幹は、鋼のように硬く反り返り、脈打つたびに力強く跳ねる。

先端は大きく張り出し、透明な先走りを大量に溢れさせていた。その滴が、幹を伝い、俺の顔に向かって太い糸を引く。重厚で逞しいその存在感は、ただそこにあるだけで、周囲の空気を雄の熱気で支配していた。

俺は言葉を失い、ただその雄大な熱さと重み、脈動する力強さに飲み込まれていた。汗と雄の匂いが濃密に混じり合い、頭を溶かすような快楽が全身を駆け巡る。

「ふうっ……！！」

三度目の降下はさらに深く、深く折り曲げられ、筋肉が悲鳴を上げていた。束ねられた悲鳴は、低く、獣じみた唸りが雄牛の喉から絞り出される。

太ももの四頭筋が極限まで引き伸ばされ、筋繊維の一本一本が震えていた。表面に浮き上がった太い血管が激しく脈打ち、鋼のようなハムストリングスが限界まで引き裂かれんばかりに張りつめる。臀部の巨大な筋肉は岩のように硬く収縮し、背中全体が汗でびっしょりと濡らしながら、力の奔流を全身に走らせていた。

雄牛を支える二本の足が、明らかに震えている。

これまでのような余裕はもう感じられない。膝が、全身が、微かに小刻みに揺れ、爪先が床を強く掴む。

しかし、それでもダラワンの力強さは衰えるどころか、かえって旺盛さを増していた。限界に挑むほどに、獣の本能がむき出しになり、熱く濃厚な雄気が全身から溢れ出す。

汗が滴り落ち、床を濡らす音さえ雄々しく響く。その三度目の最深部で、巨大な睾丸が俺の顔をこれまで以上に深く、強く、熱く押し潰した。

金玉袋が口と鼻を完全に覆い、顔面全体を埋め尽くす。汗と熱と雄の匂いがねっとりと染み込み、息をするたびに、肺の奥までダラワンの淫臭で満たされる。筋肉が限界で震える振動が、そのまま、巨大な金玉を通じて俺の顔に直接伝わってきた。

「どうだ……？俺の筋肉……感じてるか……？」

重く熱い質量が顔面を押し潰すように密着し、口も鼻も完全に塞がれる。汗と雄の熱気がまとわりつき、かろうじて吸い込んだ空気の一粒一粒に、濃厚でねっとりとした雄臭が染み込んでくる。嗅細胞の奥深くまで、ダラワンの、淫らで、圧倒的な匂いが塗り込められ、頭の芯が蕩けていく。

「……んぐっ、はっ……っ」

視界も息も奪われながら、俺はたまたま自分の股間に手を伸ばしていた。雄牛の巨大さと比べれば、まるで無力なほどに頼りないそれが、しかし疼くように熱を持っていた。指が震え、扱き上げる手が止まらない。爪楊枝のように小さい自分のものが、解放を待ち望んで震えていた。

ダラワンが低く笑う。

「ふっ……お前も我慢できなくなったか？ 俺の金玉の下で、そんなに必死に扱いてる姿……想像しただけで興奮する」

「あっ……！！ああああ……っ！！！」

巨大な睾丸が顔面の上でゆっくりと重みをずらし、さらなる圧迫と熱を加えてくる。雄臭が脳まで浸透し、理性が溶け落ちる。俺は白旗を掲げるように、量も濃さも物足りない射精を迎えてしまった。身体が小さく痙攣し、情けないほどの解放感だけが残る。

「可愛いな……お前は俺の匂いだけでイッチまうんだな」

ダラワンは満足げに俺の頬を大きな手で撫で、掠れた声で囁いた。

「まだまだ足りないだろ？ シャワーで、続きをしてやる」

雄牛は俺の手を引いて立ち上がらせ、狭いシャワールームへと連れていく。ドアを閉めた瞬間、熱い吐息と獣の低い唸りが、密室に満ちた。

水音が響き始める中、二匹の影はさらに深く絡み合い、甘く濃厚な時間を過ごしたのだった。